1905年から３年連続で東京美術学校(現東京藝術大学)に入学を果たした、小樽の若き画家たち(長谷川昇・小寺健吉・工藤三郎)は、やがて海を越えて新たな表現を求めるようになりました。彼らは小樽が最も繁栄した時代に育ち、豊かな文化的環境を背景にフランスへ渡航しました。

長谷川はルノワール研究を深めつつ、エコール・ド・パリの文化人と交流し、小寺はボナールやヴラマンクの影響を受けて色彩と構成を刷新しました。工藤は後期印象派に魅了され、サロン・ドートンヌに入選するなど成果を残します。異国の地で吸収した新しい表現は、帰国後、小樽をはじめ北海道の後進へと受け継がれました。

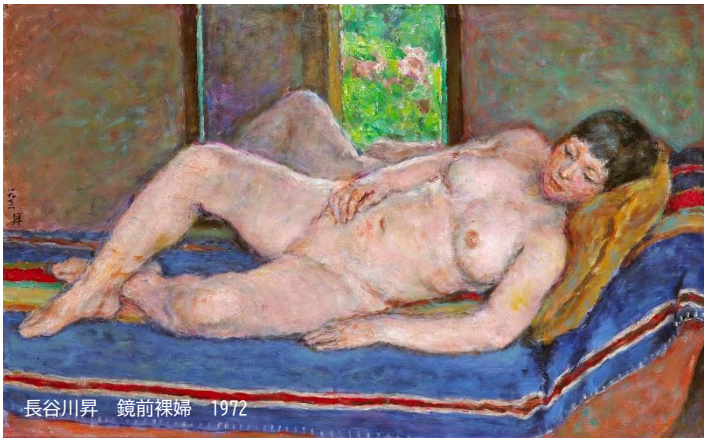
一方で、外遊が主に欧州を指した時代に、あえて東南アジアへ向かった画家・小林剛の存在も見逃せません。強烈な光と影、鮮やかな色彩に満ちた熱帯の風土は、彼の作品に新たな生命力をもたらしました。

本展では、パリで青春を燃やした三人の画家と、東南アジアへ独自の道を切り開いた小林剛の歩みを通して、小樽の画家たちが外の世界と出あい、そこから得た刺激をどのように故郷へ還流させたのかを紹介します。

彼らは外来の技法である油彩という表現手段によって、日本の風土や景観をいかに造形化するかという課題に向き合いました。長谷川、小寺、工藤の存在は、小樽に洋画を根付かせる原動力となり、小林は、市展委員、小樽美術協会会員として後進に大きな影響を与えました。

異文化体験が、国際性だけでなく、地域の芸術を豊かに育むきっかけとなったのです。本展で、彼らが海の向こうから持ち帰った新しいまなざしと、小樽の風土との出あいから生まれた絵画をご鑑賞ください。


小寺健吉　モレ―の洗濯場　1966


長谷川昇　鏡前裸婦　1972


小林剛　燈籠流し（メナム河上流）1937


小林剛　メナム河流域　1937



長谷川昇　1886－1973

福島県会津若松市に生まれのちに小樽市に転居。祖父母が開陽亭を営む。1905 年東京美術学校(現東京芸術大学)入学。1908 年文展入選。1910 年東京美術学校卒業。文展褒状。1911 年以降断続的に渡欧、パリに滞在。1915 年院展同人。1922 年春陽会創立会員。1929 年春陽会展で滞欧作品特別陳列。1957 年日展会員。日本芸術院会員。



小寺健吉　1887－1977

岐阜県大垣市に生まれ、のちに小樽市に転居。1906 年東京美術学校(現東京芸術大学)入学。1912 年光風会第 1 回展に出品、以後出品を続け評議員となる。1918 文展入選、1919、1920 年褒状を受ける。1923 年・1927 年渡欧。1943 年黒田子爵奨励資金買上となる。1950 年日展審査員、以後 5 回を務め、1970 年日展参与。



工藤三郎　1888－1932

小樽市に生まれる。1907 年東京美術学校(現東京芸術大学)入学。1912 年東京美術学校卒業、文展入選。1913 年サンフランシスコ博覧会出品。1915 年・1916 年文展入選。1918 年北海道開道五十周年記念博覧会銀牌。1918 年中国遊学。1920 年渡仏、サロン・ドートンヌなどに出品。1923 年帰国、大阪三越にて滞欧作品展開催。1924 年小樽に転居。



小林剛　1906－1986

小樽市に生まれる。1933 年東京美術学校(現東京芸術大学)卒業。奈良で古美術を研究。1937 年渡仏を試みるが国際情勢の悪化により断念。仏領インドシナ半島へ渡る。カンボジア、タイ、ベトナムで制作。1939 年帰国、小樽で個展、1941 年東京でアンコールワット個展開催。1954 年帰郷。1970 年示現会会員となる。1976 年欧州取材を叶える。